

聖書：マルコの福音書 2：1～12

説教題：罪を赦す権威

日時：2025年6月1日（朝拝）

マルコの福音書第2章は「数日たって、イエスが再びカペナウムに来られると」と始まります。イエス様は1章最後の部分では「表立って町に入ることができず、町の外の寂しいところにおられた」とありました。それは前回見たツアラアトをきよめられた人が「だれにも何も話さないようにしなさい」と言われたにもかかわらず、出て行って、その出来事をふれ回ったからでした。しかし少し状況が落ち着いたからでしょうか、イエス様は再びカペナウムの町へ戻って来られました。そして宣伝していないのにイエス様が家におられることは知れ渡り、多くの人々がそこに詰め掛けていました。そのため、戸口のところまで隙間のないほどになっていました。そんな中、イエス様は御言葉を話しておられました。福音を伝えることに献身しておられるイエス様のお姿がここにもあります。するとそこへ一人の中風の人が連れて来られます。3節の「中風の人」という部分には印がついていて欄外に、すなわち「からだが麻痺した人」とあります。彼は自分で動くことができず、四人の人に担がれていました。しかしイエス様の周りには多くの人々がいたため、近づくことができません。そこでどうしたでしょう。何と彼らは屋上に上り、イエス様がにおられるあたりの屋根をはがし、穴を開けて、中風の人が寝ている寝床をつり降ろしました。驚くべき、そしてあまりにも大胆な方法でした。さてイエス様はこの状況にどう対応されたのでしょうか。

まず注目したいことは5節に「イエスは彼らの信仰を見て」とあることです。イエス様はここでみわざを行われますが、それは「彼らの信仰を見て」と言われています。この「彼ら」とは誰でしょうか。複数形で書かれていますから、少なくとも中風の人を担いでいた四人を指すと言えます。では中風の人本人はどうでしょうか。おそらく彼も含まれているのではないかと思います。本人の承諾なしに彼をここまで連れて来ることはできなかったと思います。誰が先に言い出したかは分かりませんが、中風の人本人もイエス様のもとへ連れて行ってもらうことを願ったと思われます。しかしイエス様が目を留めた「彼ら」とは複数です。中風の人一人だけでは今回のことはできませんでした。4人の協力を得てここまで来ることができました。ここから本人だけではなく、周りの人々の信仰も重要であることを教えられます。彼ら四人は中風の人をイエス様のもとへ連れて行くために骨折りました。イエス様は彼を癒やしてくだ

さると信じなければ、ここまでのことはしなかったでしょう。この彼を担いで運ぶことも大変ですが、彼らは屋根に上り、そこを壊すことまでしました。他の人の家をこのようにするからには、後で確実に元どおりに修復すること、そのための費用を払うことも彼らは覚悟していたでしょう。そうしてまでイエス様が憐れんでくださることを期待し、信じて、彼を連れて来ました。その信仰をイエス様は「見た」と言われています。そしてそれゆえにみわざを行われたのです。このことにまず目を留めておきたいと思います。

それにしても、つり降ろされた彼に対するイエス様の言葉は驚くべきものでした。本人も含めて、そこにいるすべての人は、きっとイエス様は病気を治してくれるものと思ったでしょう。ところがイエス様は彼に「子よ、あなたの罪は赦された」と言われました。これはどういうことなのでしょう。答えから先に言うなら、イエス様は彼の最も深い必要に答えてくださいました。彼は確かに病に苦しんでいましたが、その病の根底にある問題は罪という問題でした。罪がない最初の世界に病はありませんでした。この世界に病が、そして死が入ったのは罪ゆえであると聖書は語っています。これはある特別の病にかかった人は、それだけ特別罪深い人であるという意味ではありません。イエス様は他の箇所（ヨハネ9章等）で、そういう考え方を否定されました。しかし病という問題の背後に罪という問題があるというのは本当です。病を治しても罪という問題にまでメスを入れなければ、本当の解決にはなりません。そこでイエス様は彼の根源的な問題にまでさかのぼって、その解決と祝福を与えられたのです。「子よ、あなたの罪は赦された」と。

しかしこのイエス様の言葉がここで問題を引き起こします。そこに座っていた何人かの律法学者たちが心の中であれこれ考えました。7節：「この人は、なぜこのようなことを言うのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。」 罪を赦す権威を持っているのは神お一人だけだ！という彼らの主張は正しいものです。その神の特権を人が奪い取ってはなりません。それは冒瀆行為です。しかしイエス様の行為を冒瀆と決めつける彼らの主張には欠点があります。それはイエス様が神である可能性を全く排除している点です。彼らにとってイエス様が神であるという可能性は全く考えられないことでした。それはあり得ないことでした。しかしもしイエス様が神であるならどうなるでしょう。イエス様は罪を赦す権威を持つことになります。そして信じがたいことですが、実はそうなのだ！ということの方

にこそ正解があります。そのことがこの記事を通して、またこの後の福音書の記事を通して明らかにされて行くのです。

そしてこの律法学者たちの問いと深く関わっているのは罪の赦しは目に見えない事柄であるということです。それをいいことにこのイエスという人は適当なことを言っている。口から出まかせを語り、人々をだましている。彼はペテン師である！律法学者たちはそのように思っていたわけです。イエス様はそんな彼らの心の内を見抜いて 8 節で「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを考えているのか」と問います。彼らが口から出しておらず、ただ心の中で考えただけなのに、それを言い当てたところにこの方はただの人間ではないこと、この方は神であることがほのめかされています。イエス様は続けて言われます。9 節：「中風の人に『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。」さて、どっちでしょうか。これは意外と答えるのが難しい問いです。ただ言うだけならどっちも簡単です。発音するだけなら誰でもできます。しかし律法学者たちのロジックによれば、「あなたの罪は赦された」と語る方が簡単です。罪の赦しは目に見えないため、それが起こっていなくても、さも起こっているかのような振りをすることができます。一方、「起きて、歩け」とは簡単には言えません。その直後、相手の人が歩かなければ虚しい言葉であったことがすぐ判明するからです。もちろん本質的には、先に触れた通り、罪の赦しの方が深い内容を持つ事柄です。ですからそちらの方が難しいと言うこともできます。しかしここでは律法学者たちの心を見抜いたイエス様が、律法学者たちの考えに合わせて言った言葉と見るのが良いと思います。イエス様はこうして彼らがより難しいと考える方、すなわち中風の人を癒やすことによって、もう一方の彼らが言うだけならたやすいと考えていること、すなわち罪の赦しも現実に起こっていることを示そうとされたのです。そこで 10 節で「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために」と前置きして、中風の人に言われました。「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい。」するとどうだったでしょう。彼は立ち上がり、すぐに寝床を担ぎ、皆の前を出て行きました。「それで皆は驚き、『こんなことは、いまだかつて見たことがない』と言って神をあがめた」と記されています。

私たちはここから何を学び取るべきでしょうか。人々はイエス様のみわざに接して驚きました。中風の人が立ち上がり、スタスタと歩いて出て行った姿を見て、「こんな

ことは、いまだかつて見たことがない」と言って驚嘆しました。しかし私たちはこの群衆と一緒に中風の人の癒やしを見つめて驚くだけであってはなりません。この出来事が示していることは、この男の人の癒やし以上に、罪の赦しの世界が本当にここに到来しているということです。イエス様は 10 節で「しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために」と、その目的を明確にしてこのみわざを行われました。ですからここに一番大切なメッセージがあるということになります。私たちはこのことこそを今日良く受け止めなければなりません。罪の赦しは私たちの目に良く見えなくても、イエス様とともに現実にこの世界に到来しているのだということです。

なぜイエス様はこの権威を持つのでしょうか。律法学者たちは「神以外の誰が罪を赦すことができようか」と言いました。その言葉の通り、イエス様が罪を赦すことができたとすれば、それはイエス様が神であることを意味します。そしてこの福音書は確かにその通りであると述べています。冒頭の 1 章 1 節に「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」と記され、この方は神の子、神ご自身であると言われていました。また 1 章 11 節でイエス様がバプテスマのヨハネから洗礼を受けた時、天から「あなたはわたしの愛する子」という声がありました。この天からの声もイエス様が神の子、神ご自身であることを証ししていました。しかし神であるというだけでは人の罪を赦すことはできません。聖なる神がどうして罪ある人間を赦すことができるのでしょうか。ただ赦すということでは神の義が無視されてしまいます。この難題、このジレンマを解決するために聖なる神の御子が人となって、この時ここにおられました。ローマ人への手紙 6 章 23 節に「罪の報酬は死です」とあります。罪を犯した者は「死」という報いを刈り取らなければなりません。それは創世記の最初で罪を犯した場合にアダムに起こると言われていたことでもあります。「あなたは必ず死ぬ」と。この「死」とは単なる肉体の死だけでなく、神から全く切り離された永遠の死、罪に対する刑罰としての死を意味します。このような状態にある人間を救うために神の御子なる方が人となってこの世に来てくださいました。そして私たちの代わりにその死を引き受けて死んでくださることによって、私たちを罪の滅びから救ってくださるのが聖書の語るところです。イエス様は後にこの福音書の 10 章 45 節で、ご自分が地上に来た目的について次のように述べられます。「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」 イエス様はやがて私たちの代わりに十字架にかけられ、その測り知れない苦しみと死を通して私たちの罪の代償をすべて払ってくださ

います。そのような方としてイエス様は私たちの罪を赦すことができる権威を持っておられるのです。そのような方としてこの時もここにおられたのです。

私たちが今朝心に深く留めるべきは、このイエス・キリストにおいて私たちの罪が赦されるという世界が本当にこの世に来ているということです。それは私たちの目にはっきり見えることではありません。そのため、ともすると私たちも軽んじやすいということがあるかと思います。主を信じて罪を赦されているクリスチャンも、あるいはそうでない人も、そんなに大きな違いはないかのように考えて日々を生活してしまいがち。しかしそうではないのです。この聖書のメッセージによれば人間は2種類に分かれます。よく目に見えないけれども神の前に実は罪を赦されている人か、それともその罪がまだ赦されていない人か。私たちが道行く人とすれ違う時、その相手の人は必ずこのどちらかになります。その中間はありません。そしてそのことはその人の永遠の運命についてとてつもなく重大なことを意味します。果たして私はどのようなのでしょうか。罪の赦しを受けている者なののでしょうか。それともそうではない者なののでしょうか。

罪の赦しを受けているなら、その人はもはやさばかれることはありません。終わりの日に神の前に立たされて審判を受ける時、永遠の滅びに投げ入れられることはありません。その刑罰はその人がより頼むイエス様がすでに担ってくださいました。その人は罪を赦された者として永遠の天の御国に生かされることになります。また罪の赦しはやがての日になって初めて味わうものではなく、今ここにある時から味わい始めるものでもあります。イエス様は中風の彼に「あなたの罪は赦された」と言われました。将来赦されるでしょう、ではありません。今ここでこれを受けることができます。その人は神の前に赦され、受け入れられている喜びをもって生きることができます。確信をもって大胆に神に近づき、神との交わりを喜び楽しみ、その神から力と祝福を日々受けながら歩むことができます。そしてそれはそのままやがての天国の生活へとつながって行くものなのです。

私たちはこの罪の赦しをいただいているのでしょうか。イエス様は罪を赦す権威を持っておられます。この方において罪の赦しが差し出されています。このイエス・キリストのもとへ行って、この力ある言葉を自らのものとしていただきたいと思います。「子よ、あなたの罪は赦された」と。そして神の前に赦されている喜びをもって日々

を歩む者でありたいと思います。またイエス様が四人の信仰を見て、このみわざを行われたことも心に留めつつ、私たちも愛する人たちのためにその役割を果たして、ともにこの赦しにあずかる幸いに生かされる者たちとされて行きたいと願います。